

「西條」

令和6年度 第5号

少年易老學難成 一寸光陰不可輕

教頭 森谷 信久

早いもので、今年も残すところあと僅かとなりました。令和6年、新年早々に発生した能登半島地震、大きな災害が「いつ起きてもおかしくない」ことを思い知らされました。間もなく1年が経過しますが、復旧・復興が途上であることが報道されており、被災地域の一刻も早い復旧・復興をお祈りいたします。また、今、改めて日常の備えの大切さを考えさせられます。

2学期（夏休みを含めて）を振り返ってみますと、8月氷見市で開催された全国大会には、男女ハンドボール部が共に出場し、男子は準優勝、女子はBest 8という輝かしい成績を残してくれました。また、後援会の御支援のもと運行した応援バスにより、連日多くの生徒が応援団として会場に足を運び、大会を盛り上げるとともに、西條中学校の勢いを感じさせる時間でもありました。9月運動会、10月学校祭等の学校行事の陰には、いつも保護者、育友会、地域の皆様のお力添えがありました。温かく激励してくださり、心強いものを感じました。多方面からの西條中学校への御支援、御協力に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

少年老い易く学成り難し（しょうねんおいやすく がくなりがたし）

一寸の光陰軽んずべからず（いっすんのこういん かるんずべからず）

これは私が小学校6年生の時に担任の先生から教わった言葉です。6年生の私にとって、大変難しい言葉、漢字で、「年をとるのは早いのだ」「光＝チャンスは大切にしなければ」などのイメージしかもちませんでした。しかし、強い筆圧の縦書きの板書や情熱を込めた語り口の影響か、今でもその時の様子を鮮明に思い出し、ふと頭をよぎる言葉となっています。

先日、この言葉の意味について再度調べてみました。まとめると「年老いていくのはあっという間だが、学問がものになるのは大変難しい。だから、僅かな時間も惜しんで一生懸命に勉強すべきなのだ」という意味でした。私のもったイメージは、必ずしも外れていなかったと思いますが、担任の先生が教えてくださらなければ、この言葉を知ることにはなかったとも思います。生徒にとって、周りの大人や教員の与える影響の大きさ、責任の重さを改めて感じます。

さて、令和7年の干支は「乙巳(きのと・み)」です。「乙」は、困難があっても紆余曲折しながら進むことやしなやかに伸びる草木を、「巳」は脱皮し強く成長する蛇のイメージから「再生と変化」を表します。そして、この組み合わせは「これまでの努力や準備が実を結び始める時期」を示唆しているそうです。年明けからは令和6年度最後の学期です。進学、進級に向けて、**僅かな時間を大切に、チャンスを逃さず**、全ての生徒にとって**実り多い学期**となるよう、教職員一同努めていきたいと思っています。また、令和7年も、生徒と教職員、地域の皆様が認め合い、支え合い、学び合える関係であり続けられるよう、よろしくお願いいたします。



■アクションプランの取組から

11月末に行われた学校評価アンケート（生徒用）の結果をお知らせします。1学期よりも「当てはまる」から「よく当てはまる」と回答した生徒の割合が高くなった項目がいくつか見られました。

